

令和4年度 奈良市立伏見南幼稚園 研究実践概要

園長名 櫻内 祐子

全園児数 27名

1. 1. 研究主題 「いきいきと遊び つながりあう子どもを目指して」
～「なんだろう?」「やりたい!」から～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

身近な環境に関わり、自ら気付いたり、考えたり、試したりしながら遊ぶことで、一人一人の意欲が高まり、人やものとのつながりを喜び、いきいきと活動する姿になると考えた。今年度は、子ども達の興味・関心がどこにあるのか見取り、やってみたくなる環境構成と一人一人の気付きや思いを引き出したり、つないだりするための援助の工夫に取り組んでいく。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

身近な環境や人との関わり中で、一人一人の心が動いた要因を探り、「もの」「ひと」「こと」とつながり合える環境構成や援助を工夫し、保育内容の充実を図る。

②研究の重点

- ・子ども一人一人の興味関心や育ちを捉え、職員間で共有する。
- ・身近な環境や人との関わりの中で、子どもの心が動いた要因を探り、発達段階やクラスの実態に応じた環境構成や援助の工夫を行う。
- ・友達とつながる楽しさを感じられるよう保育内容の充実を図る。

③活動の方法

【事例1】4歳児「うわ～すごいね！トロトロだね」（5月～6月）

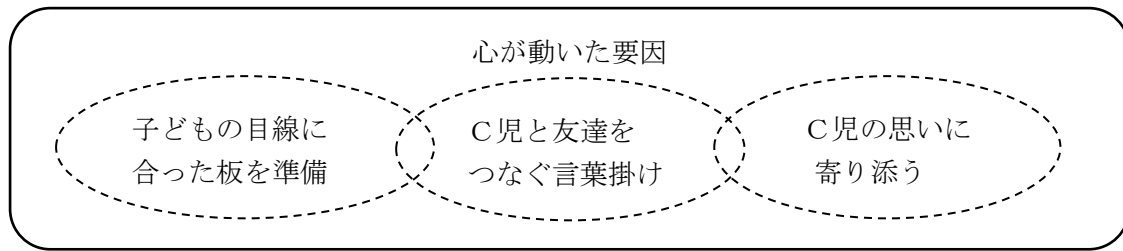
ねらい ○ 友達と関わりながら、同じ場で一緒に遊ぶことを楽しむ。

○ 自分の気付いたことや感じたことを友達に伝えながら遊ぶ。

(_____環境構成 _____保育者の援助 _____心が動く姿)

A児とB児が、じょうろで園庭に水を流し、泥づくりをしていた。茶碗やお椀、コップなどに入れて、「チョコレートやな」「トロトロできたよ」と話し、チョコレート(泥)を入れた茶碗やお椀などを並べ始めた。A児「もっと つくろう」と、用具入れから入れ物を持ってきては、2人でつくることを繰り返していた。個々に置く場所が違うので、「下に置いてたら、当たっちゃうかも・・・こんなところに置いたらどうかな」と高さ10センチ程度の板の上に置くことを提案し、準備した。B児「先生、ありがとう。並べた方が素敵だよ」A児「いっぱいつくったな」と板に並べ始めると、A児が「チョコレート屋さんみたいや」B児「ほんとだね」A児「チョコレートありますよ」と大きな声で友達を呼び始めた。そこへ、何度か保育者の所に砂場で作ったご馳走を運んできていたC児が再びやって来た。C児に「先生ね、今一緒にチョコづくりしてるんだ。難しいんだよね。触ってみる？トロトロになったかな?」と、話した。C児は、恐る恐る触り、「うわ～す

「ごい！ほんとトロトロだね」と小さな声で返した。チョコいっぱいになってきたでしょう。A君とBちゃん、もっとつくりたいんだって。C君も一緒につくってくれない？」と誘うと、C児は「うん」と頷いて笑顔になった。



<反省・評価>

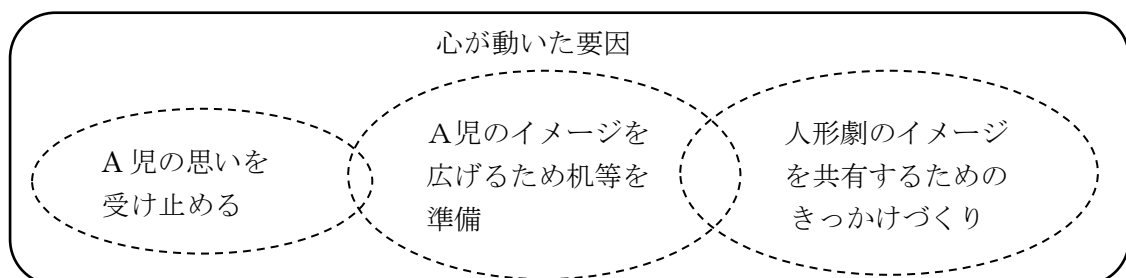
- ・ A児とB児が並べ始めたチョコレートを高さが10センチ程度の低い板に置くことで、並んでいる様子が見やすくなり、2人は“もっと並べてみたい”“こんな器にも入れたい”とイメージを膨らませながら遊ぶことができた。また、並んだチョコレートから『チョコレート屋さん』へとイメージを広げていった。
- ・ C児は保育者と過ごすことが多く、自分からしたい遊びを見つけにくかった。しかし、繰り返し2人の様子を見に来たことから、保育者が本児もしてみたいのではないかと思い、誘ったことで同じ場で遊ぶことができた。まだまだ、友達と関わって遊ぶためにはきっかけ作りが必要だが、今後も保育者が本児の気持ちを代弁したり、引き出したりしながら、友達と関わって遊ぶことの楽しさを伝えていきたい。

【事例2】4歳児「みんな 見に来てください」（2月）

- ねらい ○ 友達と互いの思いを伝え合いながら遊ぶことを楽しむ。
○ 友達と一緒にイメージを広げながら、遊びを進めていこうとする。

（ _____環境構成 _____保育者の援助 _____心が動く姿 ）

A児が自分でかいた女の子の絵を切り抜き、割り箸を付けて、「これ、なんだと思う？人形です」と嬉しそう見せにきた。「ほんとだね。すごいね。自分で動かせるし面白いね」と伝えると、「あっ、そうだ。先生、動かすところはないですか？」と尋ねてきた。「動かすところ？」と聞き返すと、「こうするんだよ」としゃがみ、人形を動かして見せた。「なるほどね。机とかでもいいのか？机なら、Aちゃんのしているようにできると思うよ」と机を出し、作品展でつくった草を準備した。「先生、本当の人形劇みたい！」と嬉しそうにA児が人形を動かしていると、B児とC児が、「Aちゃん、どうやってつくるの？」と聞きにきた。A児は、B児とC児につくり方を教え、一緒につくることを楽しんでた。少しすると、「みんな 見に来てください」と、3人の元気な声が聞こえてきた。しかし、3人は思い思いの場所から、好きに人形を動かしているのので、「先生、見たいけど、見えないよ」と知らせると、A児が、「こっちから3人でしないと見えないよ。おむすびころりと一緒だよ」と、生活発表会のことを思い出し、2人に知らせた。B児「あっそっか。そうだよね」C児「先生はお客さんだもんね」と、同じ方向へ移動した。そして、再び3人で「みんな 見に来てください」と、人形劇を始めた。



<反省・評価>

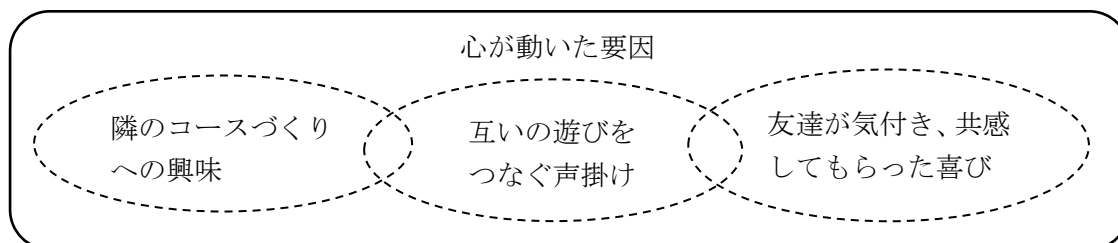
机と共に机の上に作品展でつくった草を置いたことで、よりA児がイメージした人形劇の舞台に近づくことができた。また、そのことが遊びを広げるきっかけになり、友達ともイメージを共有しやすくなった。保育者も子どもとイメージ共有することで、より子どものイメージが実現できるような環境構成を行うことができると再確認した。

【事例3】5歳児 「みてみて、つながった」(5月)

- ねらい ○ 友達と一緒に試したり、工夫したりしながら遊ぶ楽しさを味わう。
○ 自分の思いを友達に伝えたり、考えを出し合ったりして遊びを進める。

(.....環境構成保育者の援助心が動く姿)

砂場で水路をつくりたいと、気の合う友達を誘い合い、掘り進めている。すぐ隣ではトイを組み合わせて、水の流れるコースをつくりたいと数名が遊んでいる。それぞれが自分たちのやりたいことを試し遊んでいるが、互いの遊びには気付いていないようであった。そこにA児がやってきて、水路をつくる遊びに加わった。その時、A児が「あっちとつなげたらどうなるんだろう」と言った。A児は遊びに加わる前に、隣のコースづくりの遊びにも興味を示し、目を向けていたようであった。そこで、周りの友達にもA児の思いが伝わるように、保育者が「そうだね、どうなるんだろう」と思いを受け止める声掛けをした。すると、周りの友達もそのことに気づき、「ほんとだ！やってみよう」「つなげてみよう」と周りの友達がしている遊びに興味をもった。A児は、友達に自分の気づきに共感してもらったことで「こことこことをつなげよう」と嬉しそうに話し、「みんなでやろう」と遊びが広がった。同じ場の2つの遊びが1つになり、「みてみて、つながった」と、友達同士、笑顔で話した。



<反省・評価>

- ・気の合う友達とやりたいことを試して遊んでいた姿はあったが、友達の輪を広げて遊んで欲しいと考えていた。A児が遊びに加わり、両方の遊びに興味を示し、考え、言葉にしていたことが、互いの遊びをつなぐきっかけとなってほしいと考えた。
- ・A児の気づきを認め、周りの子ども達が互いの遊びに気付くよう働きかけたことで、次々と意見が出て、友達と一緒にイメージを広げて遊ぶことができた。その中で友達との関わりが広がり、一緒に遊びを進める楽しさを味わうことができた。

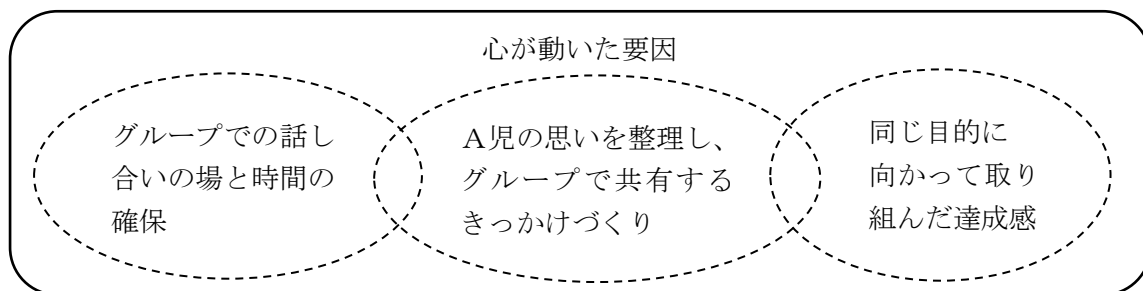
【事例4】5歳児「ジンベエザメができた」(11月)

- ねらい ○ 友達と思いを出し合い、共通のイメージをもって活動する楽しさを味わう。
○ 互いに考えを話し、目的をもって進めたり、役割分担したりして取り組む。

(.....環境構成保育者の援助心が動く姿)

遠足で行った『海遊館』で見た海の生き物に興味をもち、「幼稚園にも海遊館をつくらう」とクラスで相談してつくることになり、グループに分かれて、大きな模造紙に共同で

魚をかく活動を取り入れた。各グループで友達と「大きい魚と小さい魚がいたね」「カニも見た」など、どんな海の生き物がいたのか話し合いながら進めていた。すると、A児が「あ！僕ジンベエザメかいてみたい」と話した。それを聞いていたB児とC児も「それいいね！私もかきたい」と話した。そこにD児もやってきて、「ジンベエザメって大きかったよね。かいてみたいけど、ここにかけるかなあ」と考えたこと友達に伝えた。それをみていたA児が「あ、いいこと考えた。みんなで一緒にかいたらいいやん」と考えたことを話した。 D児が「一緒にどうやってかくの？」と尋ねたので、保育者が「体、ひれ、しっぽとか分担してかくってことかな？」とA児の思いを整理して伝えた。「わかった！」「みんなでやってみよう」「じゃあ、誰が体をかく？」と自分たちで相談した。決めた順番で、「ここでいいかな」「いい感じだね」と、自分たちで互いに確認し合ったり、認め合ったりしてかくことができた。完成するとグループのみんなで「わあ、できた」と、笑顔で顔を見合わせ喜んだ。



<反省・評価>

- ・遠足にいった共通経験から、互いがイメージを共有して思いを出し合いながら活動を進めていくことができた。その中で、『大きなジンベエザメをつくりたい』という目的をもって、自分たちで話を進めて、取り組むことができた。
- ・保育者が話を整理したことで、子ども同士が共通理解し、互いに確認し合ったり、認め合ったりすることができた。友達同士話し合い、自分たちなりに一つの目的に向かっていく過程を保育者はしっかり見取り、丁寧に関わりながら見守ることが大事だと感じた。

5. 研究の成果

4歳児は、保育者との関わりを通して、安心して園生活を過ごすことを基盤に、「もっとやりたい」「おもしろい」「楽しい」という気持ちが膨らむことが多く、保育者を介して、友達とのつながりが広がった。5歳児は、昨年度の経験や友達との関わりを基盤に、友達と一緒にすることで、友達の刺激を受けたり、今までの経験とつないだりして、「やりたい」「なんだろう」「楽しい」と、友達とのつながりを深めていた。一人一人の子どもの興味関心や遊びの面白さを理解し、共感したり、友達の思いを感じたりできるよう援助や環境構成の工夫をすることで、「ひと」「もの」「こと」とのつながりを深め、遊びが豊かになっていくことを再確認した。

6. 今後の課題

- ・子どもの心の動きを敏感にキャッチし、環境構成や援助の在り方を探り、振り返り、再構成していく。
- ・子どもが自ら気付いたり、考えたり、試行錯誤したりしながら、継続して遊べる場と時間を保障していく。
- ・一人一人の子どもが自己発揮するとともに、友達の思いや考えに気付き、互いに認め合える保育の充実を図っていく。